

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Why “Quantifier + dakeda” Tends to Be Pragmatically Impermissible?

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中西, 久実子, NAKANISHI, Kumiko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001419

なぜ「数量語+だけだ」は不自然になりやすいのか

中西久実子

京都外国語大学／国立国語研究所 共同研究員

要旨

日本語学習者は、「彼は8歳だけだ」のような「数量語+だけだ」など「名詞+だけだ」を多用することが多い。先行研究では、名詞文の述語の位置の「だけだ」について「量による規定をおこなうが、質による規定とは相入れないのではないかと考えられる」（森本 1992: 48）とされている。たしかに、「彼は係長だけだ」のように名詞「係長」に「だけだ」を接続すると不自然になる。これに対して、中西（2014）では、「甘えん坊だ」のような「名詞」に「だ」が付いて述語になったものに、さらに「だけだ」を付けて「彼は甘えん坊なだけだ」としても不自然にならない反例があることが指摘されている。つまり、量による規定の場合は「名詞+だけだ」という形しか使えないが、質による規定の場合は、「甘えん坊なだけだ」のように「名詞+な+だけだ」という形で許容されることがあるというのである。しかし、「だけだ」が不自然になる要因が明示されていないため、たとえば、「彼は父より少し年下なだけだ」などの「だけだ」が不自然ではないことなどには説明がつけられない。

そこで、本稿では、「数量語+だけだ」など「名詞+だけだ」がなぜ不自然になりやすいかという決定的な要因を明示する。不自然と判断される決定的な要因は、補集合の要素の存在の否定（＝「他はない」という「モノの非存在」）が読み取れないことである。たとえば、「この本は1000円だけだ」の「1000円」は「安価だ」というように形容詞的に解釈されていて、前提「高価だ」との間に明確な区切りがなく、補集合の要素の存在の否定（＝「他はない」という「モノの非存在」）が読み取れないので、「だけだ」が不自然と判断される。「数量語+だけだ」は形容詞的に解釈されがちで、補集合の要素の存在の否定（＝「他はない」という「モノの非存在」）が読み取れないので、不自然になりやすい*。

キーワード：とりたて助詞、「だけだ」、数量語、形容詞述語、非存在

1. はじめに

日本語学習者は、(1)の「係長」のように主語の性質を規定する名詞、そして、(2)の「千円」のような主語の性質を規定する数量語に直接に「だけだ」を接続しがちである。本稿では、(1)のような「名詞+だけだ」と、スケールに関わる(2)のような「数量語+だけだ」を便宜上まとめて「名詞+だけだ」と呼ぶ。

(1) *かれは係長だけです。 (森本 1992: 46)

* 本稿は、国立国語研究所機関拠点型基幹研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」（プロジェクトリーダー：窪田晴夫、「とりたて表現の対照研究」班リーダー：野田尚史）の研究成果であり、平成28（2017）年2月19日に国立国語研究所でおこなわれた「Prosody and Grammar Festa」「対照言語学」プロジェクト第1回合同研究発表会における口頭発表「日本語学習者のとりたて表現の使用実態と習得の問題」を基にしています。発表会場でご意見をいただいた皆様、そして、本稿をご査読くださった査読者および編集委員会の先生方にも心よりお礼申し上げます。

- (2) 学習者「まあ、(その洋書は) paperback があるから、(調査者「うん」) 多分一、まあ、日本でも買える、かもしれない。多分一、あの、千円一、(調査者「うん」) ぐらいだけですよ。」 (上村コーパス¹, 英語話者, 上級-中, BP)

いくつかの先行研究はあるが、なぜ述語の位置の「名詞+ただだ」が不自然と判断されやすいかという決定的な要因は明らかにされていない。

そこで、本稿では、日本語学習者が用いる (1) (2) のような「名詞+ただだ」を対象にして、なぜこれらが不自然になりやすいかという要因を解明する。

2. 「名詞+ただだ」についての先行研究の問題点

2.1 安部 (1999)

「ただだ」には、(1) の「係長」、(2) の「千円」のような主語の質を規定する名詞に接続する「ただだ」のほかに、(3) の「バナナ」のように素材レベルのモノとしての名詞に接続して量の規定をおこなう「ただだ」もある。素材レベルのモノとは、「ものの的な性格 (鈴木 1972: 257)」「素材 (渡辺 1971)」のことで、(3) のような「ただだ」は「典型的なダケダ (安部 1999)」「排他用法 (森山 2002)」などと呼ばれている。

- (3) 朝食はバナナだけだ。 (作例)

先行研究では、述語の位置の「ただだ」というのは、質を規定する「ただだ」であれ、量を規定する「ただだ」であれ、述語以外の位置の「だけ」とは前提集合のあり方が異なるとされている。安部 (1999: 36) では、(4) について、「満足 / 確信 / 評判」といった、「発話者の主観的尺度に基づく前提」があり、「この、〈発話者の主観的尺度に基づく前提〉を満たすものとして想定される事象の集合が、すなわち、ダケダ文において想定される集合なのである。」とされている。つまり、(4) のような述語の位置の「ただだ」では、「〈発話者の主観的尺度〉に基づいて設定された、発話者の主観的色付けがなされた集合 (安部 1999: 45)」を設定するが、他方、述語以外の位置の「だけ」の場合は、「発話者の主観的尺度という色付けがな」というのである。

- (4) X: 新人賞受賞、おめでとう。おもしろいと評判だね。
Y: [実体験を書いた] ダケだ。たいしたことは書いていないのに照れてしまうよ。
(安部 1999: 34)

しかし、安部 (1999) では、(1) (2) のような日本語学習者が多用する不自然な「ただだ」について、前提集合の何が否定されて主観的色付けがなされるのかは明らかにされていない。本稿では、日本語学習者が多用する不自然な「ただだ」、すなわち、主語の性質を規定する名詞に接

¹ 上村コーパスとは、「インタビュー形式による日本語会話データベース」(『じんこんもん DATABASE vol.1』(重点領域『人文科学とコンピュータ』総括班 (代表: 上村隆一) (1998)) の通称で、日本語学習者、および、日本語母語話者に対する OPI のデータを文字化した言語データである。学習者の母語は、英語 28 人、韓国語 10 人、中国語 4 人、その他ロシア語、デンマーク語、ドイツ語が各 2 人ずつである。

続する「だけだ」について、何を前提にしている、何を否定しているのかを明らかにする。

2.2 森本 (1992)

(1) の「かれは係長だけです」のような「だけだ」は不自然と判断されやすいが、その原因について森本 (1992: 48) では (5) のように述べられている。

- (5) 個数を表すものは、存在による規定、そうではないものは、概念による規定としてみよう。いいかえれば、量による規定、質による規定である。そうすると、「だけです」の用法の特徴は、量による規定をおこなうが、質による規定とは相入れないのではないかと考えられる。

ところで、(1) の「係長だけだ」は「名詞+だけだ」という構造だが、(6) のように「名詞」に「だ」が付いて述語になったものに、さらに「だけだ」を付けた形にしても不自然なままである。

- (6) *かれは係長なだけだです。

しかし、中西 (2014) で指摘されているように、質の規定の場合は、(7) のように「な」を介してなら質を規定する名詞述語「甘えん坊だ」に「だけだ」が接続できる実例があり、(5) は「だけだ」が不自然になる決定的な要因としては不十分である。

- (7) 瑞穂「この間おじいちゃんのお見舞い行ったらさ、ほら、気弱になってるから人が恋しくて。わかるでしょ、睦月さん。」
睦月「そりゃやっぱり寂しいもの。」
笑子「大丈夫なの、おじいちゃん。」
瑞穂「まだまだしっかりしてるわよ。甘えん坊なだけだなの。孫の顔を見るまでは……て。」
(中西 2014: 19, 原典は松岡錠司『きらきらひかる』)

2.3 中西 (2014)

中西 (2014) では、(7) (8) のように主語の質を規定する名詞述語でも「だけだ」が接続できる例が森本 (1992) の反例として示されている。

- (8) 長男は花粉症で風邪だが、次男は花粉症なだけだ。(中西 2014: 21)

つまり、量による規定の場合は基本的には「名詞+だけだ」を使うが、質による規定の場合は「甘えん坊だ」のような「名詞」に「だ」が付いて述語になったものに、さらに「だけだ」を付けて「甘えん坊なだけだ (「名詞な+だけだ)」という形で許容される場合があるというのである。

そして、(7) (8) の「だけだ」が不自然にならないのは、(9) a (9) b の両方が満たされているからだと結論づけられている。

- (9) 「X だけだ」は以下の a. と b. の両方を満たしていなければならない。

- a. 「X だけだ」は「 $X + X$ の補集合 (X 以外)」, すなわち, 「X と X の補集合 (X 以外) が同時に存在するセット」を前提集合にしていなければならない。
- b. 「X だけだ」は前提集合の否定を表すが, その否定は「 $X + X$ の補集合 (X 以外) のセットではない。X はあるが, X の補集合 (X 以外) はない」で, 補集合の要素が存在しないという非存在を表していなければならない。

(中西 2014: 20, 例文番号は本稿のもの)

「補集合 (寺村 1986: 260)」とは, 全体集合 (U) からとりたてられる要素 X を除いた集合 ($U - X = X$ 以外) のことである。たしかに, (8) では「花粉症で, かつ, 花粉症以外 (= 風邪) だ」が前提集合として想定されていて, 「花粉症はあるが, 花粉症以外 (風邪) はない」という非存在が表されているので, (9) a (9) b が満たされている。

しかし, 中西 (2014) では, 「(9) a (9) b が満たされないと「だけだ」が不自然になる」というような消極的な記述しかない。

3. 問題のありか

中西 (2014) では, 「だけだ」が自然になる要因は示されているが, 不自然になる要因は明示されていない。そのため, (10) のような「だけだ」がなぜ不自然でないかには説明がつけられない。

- (10) (母の恋人は) 母と同級生だから, もう四十半ば近くの筈だ, と私は思った。父より少し年下だけ。けれども, まるで違う種類の生き物に見える。

(山田詠美『はじめての文学 山田詠美』「海の庭」)

(9) b で示されているとおり, 「だけだ」という形が自然であるためには「前提集合の否定を表していなければならない」。たしかに, (10) の話し手は「母の恋人は父より「かなり年下な」のではなく, 「少し年下な」のだ」という否定を表そうとしているが, 「少し年下だ」と同時に存在する補集合の要素は考えにくい。したがって, (9) a の前提集合「「かなり年下で, かつ, 「少し年下だ」」もあり得ないので, (9) a に抵触するはずである。しかし, (10) の「だけだ」は不自然ではない。

そこで, 以下では, 「だけだ」の「だけ」が何を否定しているのかを考えることによって, (10) のような「だけだ」が不自然にならないのはなぜか, そして, 「だけだ」が不自然になる決定的な要因は何かを導いていく。

4. 典型的な用法の「だけだ」の「だけ」が表す否定

4. では, まず, (3) のような典型的な用法の「だけだ」の「だけ」が何を否定しているのかについて述べる。

- (3) の「バナナ」は「朝食として想定されるセット {パンとバナナとサラダなど}」の中の要

素でなければならない(中西 2012: 68)。そして、(3)の「だけ」は、集合「バナナとバナナ以外のモノ」を前提集合としていて、その前提集合からバナナを引いた差が補集合の要素「バナナ以外のモノ」となる。これを整理すると、表1のようになる。

表1 (3)における補集合の要素と前提集合

	補集合の要素	前提集合
X だけだ	X 以外のモノ	X + X 以外のモノ
バナナだけだ	バナナ以外のモノ	バナナとバナナ以外のモノ

ここで注目しておきたいのは、(3)では、「朝食は「バナナとバナナ以外のモノ」というセットなのではない」という否定がなされているが、この否定は、「朝食は「バナナ以外の他のモノ」はない」という「モノの非存在」を表しているということである。換言すると、「だけだ」の「だけ」は、表2に示すように、「前提集合の否定」から「補集合の要素の存在の否定(他はない)」という「他はない」というモノの非存在を導いているということになる。このように「前提集合の否定」から「補集合の要素の存在の否定(=他はない)」が導けるようになっていることは、どんな種類の「だけだ」であっても同じである。

表2 (3)の「だけ」が表す否定

	補集合の要素の存在の否定	前提集合の否定
X だけだ	X 以外の他のモノはない(他はない)	【X + X 以外のモノ】ではない(前提集合なのではない)
バナナだけだ	バナナ以外のモノはない	【バナナとバナナ以外のモノ】なのではない

ただし、質を規定する名詞に接続する「だけだ」の場合、特に、「数量語+だけだ」の場合には、「前提集合の否定」から「補集合の要素の存在の否定(=他はない)」が導きにくくなっており、これが「だけだ」の不自然さと関連があると考えられる。

以下では、まず、5.において、質を規定する名詞に接続する「だけだ」の場合には、2つのタイプがあることを指摘する。1つは「前提集合の否定」から「補集合の要素の存在の否定(他はない)」が導けるタイプで、もう1つはすぐには導きにくい、かろうじて導けるタイプである。どちらのタイプも「補集合の要素の存在の否定」で「他はない」が表されているので、「だけだ」は不自然にならない。続く6.においては、「だけだ」が不自然になる要因は「補集合の要素の存在の否定(他はない)」が導けないことであることを示す。そして、7.において、「数量語+だけだ」では「補集合の要素の存在の否定(他はない)」が導けないので、「だけだ」が不自然になりやすいということを導く。最後に、8.でまとめと今後の課題を述べる。

5. 質を規定する名詞に接続する「だけだ」の「だけ」は何を否定しているのか

5.では、質を規定する名詞に接続する「だけだ」の「だけ」には2つのタイプがあることを指摘する。5.1では、「前提集合の否定」から「補集合の要素の存在の否定(他はない)」が導ける

タイプについて、そして、5.2では導きにくいタイプについて述べる。

5.1 「前提集合の否定」から「他はない」が導きやすいタイプの「だけだ」

(11)の「だけだ」は主語の性質を規定する名詞述語「花粉症だ」に接続している。表3に示すとおり、「だけだ」の「だけ」が表す「補集合の要素」は「花粉症以外のモノ (= 「風邪だ」)」で、「前提集合」は「花粉症で、かつ、風邪だ」である。

(11) (= (8)) 長男は花粉症で風邪だが、次男は花粉症だけだ。(中西 2014: 21)

表3 (11)における補集合の要素と前提集合

	補集合の要素	前提集合
X だけだ	X 以外のモノ	X + X 以外のモノ
花粉症 <u>だけだ</u>	花粉症以外のモノ (= 「風邪だ」)	花粉症で、かつ、風邪だ

(11)では、「前提集合の否定」から「補集合の要素の存在の否定 (他はない)」が導きやすい。表4に示すとおり、(11)では、「前提集合の否定」はないわけではないが、「補集合の要素の存在の否定 (他はない)」のほうが目立っている。しかし、「補集合の要素の存在の否定」はないわけではないので、「だけだ」は不自然にならない。

表4 (11)の「だけ」が表す否定

	補集合の要素の存在の否定 他はない	前提集合の否定 前提集合なのではない
花粉症 <u>だけだ</u>	【花粉症以外のモノ (= 風邪)だ】 はない	【花粉症で、かつ、風邪な】の ではない

(12)も同様で、「前提集合の否定」から「補集合の要素の存在の否定 (他はない)」が導きやすい。

(12) アナウンサー「じゃ、(森口尚史氏は) 東大の教授とかじゃないんですね」

辛坊治郎「東大病院の特任研究員だけです。教授でもなんでもない。」

(読売テレビ「す・またん」2012年10月15日)

表5に示すように(12)の「補集合の要素」は「特任研究員以外のモノ」で、「前提集合」は「特任研究員で、かつ、教授だ」である。

表5 (12)における補集合の要素と前提集合

	補集合の要素	前提集合
X だけだ	X 以外のモノ	X + X 以外のモノ
特任研究員 <u>だけだ</u>	特任研究員以外のモノ	特任研究員で、かつ、教授だ

そして、表6からわかるように、(12)で「補集合の要素の存在の否定」は「特任研究員だ」以外のモノはないで、「前提集合の否定」は「特任研究員で、かつ、教授な」のではないで

ある。(12)でも、「前提集合の否定」はないわけではないが、「補集合の要素の存在の否定（「教授だ」はない）」のほうが目立っている。

(12)の話し手は「教授なのではなく、特任研究員なのだ」ということを言おうとしているのだが、この「教授なのではなく」という否定は、表6の「補集合の要素の存在の否定」のことであり、「前提集合の否定」ではない。しかし、「前提集合の否定」から「補集合の要素の存在の否定（他はない）」が導けているので、「だけだ」は不自然にならない。

表6 (12)の「だけ」が表す否定

	補集合の要素の存在の否定	前提集合の否定
	他はない	前提集合なのではない
特任研究員なだけだ	【「特任研究員だ」以外のモノ（＝教授などの性質）】はない	【特任研究員で、かつ、教授な】のではない

5.1での考察を整理すると、「前提集合の否定」はないわけではないが、「補集合の要素の存在の否定」のほうが目立っている場合があり、「前提集合の否定」から「補集合の要素の存在の否定（他はない）」さえ導けているならば、「だけだ」は不自然にならないということになる。

5.2 「前提集合の否定」から「他はない」が導きにくいタイプの「だけだ」

5.2では、「前提集合の否定」から「補集合の要素の存在の否定（他はない）」が導きにくい、かろうじて導けるといふタイプについて述べる。

(13)の話し手は「母の恋人は、父よりかなり年下なのではなく、少し年下だ」ということを言おうとしている。この否定「かなり年下なのではなく」は、表7に示すように「前提集合の否定」である。そして、「補集合の要素の存在の否定」は「「少し年下だ」以外のモノはない」である。

(13)(=10) (母の恋人は)母と同級生だから、もう四十半ば近くの筈だ、と私は思った。父より少し年下なだけ。けれども、まるで違う種類の生き物に見える。

(山田詠美『はじめての文学 山田詠美』「海の庭」)

表7 (13)の「だけ」が表す否定

	補集合の要素の存在の否定	前提集合の否定
	他はない	前提集合なのではない
少し年下なだけ	「少し年下だ」以外のモノはない	【かなり年下な】のではない

ところで、(13)で前提集合となっているのは、「少し年下であり、かつ、かなり年下だ」という集合ではない。表8に示すような「かなり年下だ」である。だとすると、補集合の要素は何なのかという疑問が生じる。(13)の補集合の要素は、前提集合「かなり年下だ」から「少し年下だ」を引いた差になるはずだが、両者の間に「個のモノ」の存在は読み取りにくいからである。

表8 (13)における補集合の要素と前提集合

	とりたてられている要素	補集合の要素	前提集合
X だけだ	X	X 以外のモノ	X + X 以外のモノ
少し年下なだけ	少し年下だ	読み取りにくいを読み取れないわけではない	かなり年下だ

しかしながら、「かなり年下だ」を「10歳ほど年下だ」に、そして、「少し年下だ」を「2歳ほど年下だ」などと読み替えれば疑問は解消される。(14)のように、前者から後者を引いた差が「8歳(10歳 - 2歳 = 8歳)」というように算出され、モノの存在が認識されるからである。

(14) 補集合の要素 = 「かなり年下だ」から「少し年下だ」を引いた差(10歳 - 2歳 = 8歳)

このモノが「補集合の要素の存在」として認識でき、(15)のように「補集合の要素の存在の否定(他はない)」も問題なく認識されるようになる。

(15) 補集合の要素の存在の否定 = 「かなり年下だ」から「少し年下だ」を引いた差(10歳 - 2歳 = 8歳)は存在しない

5.2での考察を整理すると、次のようになる。(13)では、「少し年下だ」と同時に存在する補集合の要素は読み取りにくく、(9) aの前提集合「「かなり年下で、かつ、「少し年下だ」」もあり得ないが、「だけだ」が不自然ではない。形容詞的な述語を数量で読み替えて「補集合の要素の存在の否定(他はない)」がかりうじて読み取れるようになれば、「だけだ」は不自然にならないからである。

6. 質を規定する名詞述語に接続する「だけだ」が不自然と判断される要因

先述したとおり、次の(16)「係長」のようなスケールを暗示させるような名詞は「だけだ」を接続すると不自然と判断されがちである、(16)の話し手は「部長なのではなく、まだ係長だ」と言おうとしている。この「部長なのではなく」は表9に示すとおり、「前提集合の否定」である。(16)の「だけ」が否定するのは表9のようになるはずであり、「補集合の要素の存在の否定」は「「係長だ」以外のモノはない」で、「前提集合の否定」は「部長なのではない」である。

(16) かれは係長だけです。まだ部長になっていません。

(第1文は森本(1992)、第2文は筆者による作例)

表9 (16)の「だけ」が表す否定

	補集合の要素の存在の否定	前提集合の否定
	他はない	前提集合なのではない
(16)	「係長だ」以外のモノはない	【部長な】のではない

しかし、(16)では、「係長だ」と「部長だ」が別個のモノとして認識できない。「だけ」に前接する要素「係長だ」が「係長だ→部長だ」というスケールを想起させており、「係長」と「部長」

の質的な区切りが明確でないからである。しかもこのコンテキストでは、「係長だ」は「未熟だ」というような形容詞的な述語として、そして、「部長だ」などは「ベテランだ」というような形容詞的な述語として解釈されているからである。そうなると、補集合の要素の存在、すなわち、「部長だ」から「係長だ」を引いた差のモノが個の存在として想定できない。当然のことながら、「補集合の要素のモノとしての存在の否定（他はない）」も表せず、「だけだ」が不自然になる。

日本語学習者による不自然な「だけだ」は、(16)のように「前提集合の否定」から「補集合の要素の存在の否定（他はない）」が導けない場合である。

「だけだ」が自然になる要因・不自然になる要因を(17)として特記しておく。

(17) 「だけだ」が自然・不自然と判断される要因

述語の位置の「だけだ」は、「～なのではなく、～だけだ」というような否定をともなって表されることが多い。この「～なのではなく」は「前提集合なのではなく」のことが、「補集合の要素はない」という否定をも表している。普通は「前提集合なのではなく」から「補集合の要素はない（他はない）」が導かれるが、導きにくい場合もある。しかし、「補集合の要素はない（他はない）」というモノの非存在がかろうじてでも読み取れば「だけだ」は不自然にならない。逆に、「補集合の要素はない（他はない）」というモノの非存在が読み取れないならば「だけだ」が不自然になる。

(18)も同様である。(18)の「遊びだ」は形容詞的な述語であり、「遊びだ→バクチだ→職業的だ」など序列による程度差がスケール上に暗示されているが、それぞれが個別のモノの存在として区切ることはできない。「バクチだ」から「遊びだ」を引いた差が何らかのモノの非存在（他はない）として認識できないので、「だけだ」が不自然になる。

(18) 調査者「中国はバチンコありますか。」

学習者「やー、今、たぶんないとはいえ、言えません（調査者「んー」）あるところ、あります、（調査者「んー」）でも直接はお金。遊びじゃなくて、（調査者「ええ」）安くて、もの物で、交換します。」

調査者「日本も、物で交換するんですけどね、本当は、（学習者「うん」）ええ。」

学習者「でも、お金、お金、中国たとえば、10円ぐらい、聞くところによると、（調査者「ええ」）10円ぐらい遊んで、勝ったら、たとえば、たとえばお茶などももらいます、（調査者「あーそうですか」）遊びだけ。」

(KY コーパス², 中国語話者, 中級-上, CIH01)

(19)も同様である。(19)で話し手が言おうとしているのは、「その旅行は出張であり、留学ではなかった」である。ここでも「ビジネストリップ（出張）だ」も「父親の出張の付き添いだ

² KY コーパスとは、日本語学習者に対する OPI のデータを文字化した言語データ（代表：鎌田修・山内博之）である。学習者の母語は、英語 30 人、韓国語 30 人、中国語 30 人である。

→自分の意志で行く留学だ」という序列による程度差がスケール上に暗示されている。しかし、それぞれが個別のモノの存在として認識することはできないし、両者のあいだに明確な区切りも認識できない。何らかのモノが存在しないという非存在（他はない）が表せていないので、「ただけだ」が不自然ということになる。

(19) 調査者「今回初めてですか？日本に一。〔略〕」

学習者「初めは、さいさい最初にはあーむ、小さい時8歳だけ。(調査者「あー」) あーその時は旅行。(調査者「うん」) でもあーむ15歳と18歳(調査者「うん」) あーいた時(調査者「うん」) あーむこ、かぞ、あーぐら、あー両親(調査者「うんうん」) 両親、すいません。両親のあー一緒に(調査者「うん」) あービジネストリップだけ。だから短い。」 (上村コーパス, 英語話者, 中級-中, LY)

7. 「数量語+ただけだ」が不自然になりやすい理由

7. では、(17) をもとに「数量語+ただけだ」が不自然になりやすい理由を示す。

7.1 「補集合の要素の存在の否定」がわかりにくくて不自然な「数量語+ただけだ」

(20) の「8歳」など数量語を含む名詞は、コピュラ「だ」をともなうと「8歳だ」となって形容詞的な述語として主語の性質を規定している。このような述語に「ただけだ」を接続すると、不自然になりやすい。

(20) 調査者「今回初めてですか？日本に一。〔略〕」

学習者「初めは、さいさい最初にはあーむ、小さい時8歳だけ。(調査者「あー」) あーその時は旅行。(調査者「うん」) でもあーむ15歳と18歳〔略〕」 (上村コーパス, 英語話者, 中級-中, LY)

(20) では学習者は「私はまだ8歳だったので、自分の意志で留学できる年齢ではなかった」と言おうとしているが、このような「ただけだ」は不自然と判断される。(20) の場合の「8歳だ」は「まだ自分の意志で留学できない年齢だ」という形容詞的な意味で解釈されているからである。そうすると、表10に示すように、「8歳だ」と「自分の意志で留学できる年齢だ」の間に何ら補集合の要素のモノの非存在が読み取れなくなる。(20) の「ただけだ」は、モノの非存在が表せていないので、(17) に照らし合わせて「ただけだ」が不自然と判断されるわけである。

表10 (20) における補集合の要素と前提集合

	とりたてられている要素	補集合の要素	前提集合
X だけだ	X	X 以外のモノ	X + X 以外のモノ
8歳だけだ	8歳だ (自分の意志で留学できない年齢だ)	読み取れない	自分の意志で留学できる年齢だ

(21) も同様である。(21) では学習者は「私はまだ一年生であり、専門についてよくわかって

いるような上級生ではない」と言おうとしているが、その「上級生だ」と「一年生だ」の間に「補集合の要素のモノの非存在（他はない）」が読み取れない。それで「だけだ」は不自然になる。

- (21) 調査者「専門は〔略〕経済学っても広いと思いますけど特に、なんについて。」
 学習者「(私は) まだー、一年生、いち、ねんだけ (調査者「えー」) はは、まだ、分かりません。」
 (上村コーパス, 中国語話者, 中級-上, EC)

表 11 (21) における補集合の要素と前提集合

	とりたてられている要素	補集合の要素	前提集合
X だけだ	X	X 以外のモノ	X + X 以外のモノ
一年生だけだ	一年生だ	読み取れない	専門についてわかっている上級生だ

(22) も同様である。

- (22) 学習者「その日はカットが一、あの、1000 円だけでした、(調査者「うん」) あのほんとに、悪い所でした、だめ、それあの、秋休みのところのーときでしたけれど、前はこう、でしたけど、(調査者「うん」) そのヘアカットのあとでーあの、こーんな、(調査者「ふーん」) それはあの、あのそれ以外は全然問題ないですね〔略〕」
 (KY コーパス, 英語話者, 上級-上, EAH03)

(22) では、理髪店でのヘアカットの料金の相場が外国に比べて高額だというコンテクストから、「1000 円」が幅のある量ではなく、終了限界点そのものであり、しかも「安価だ」という形容詞的な意味で解釈されるものだとわかる。単に終了限界点しかマークしておらず、それが形容詞的に解釈されるとなると、表 12 に示すように、「高額だ」と「1000 円で安価だ」の間に「補集合の要素の存在の否定（他はない）」が読み取れない。(22) の「だけだ」が不自然なのはこのためである。

表 12 (22) における補集合の要素と前提集合

	とりたてられている要素	補集合の要素	前提集合
X だけだ	X	X 以外のモノ	X + X 以外のモノ
1000 円だけだ	1000 円だ (安価だ)	読み取れない	高額だ

7.1 での考察を整理すると、次のようになる。「だけだ」が不自然になるのは、「補集合の要素の存在の否定（他はない）」という非存在が読み取れないからである。特に、日本語学習者が用いる「彼は係長だけだ」や「私はまだ 8 歳だけだ」などでは、「係長」「8 歳」などが終了限界点そのものであり、形容詞的に解釈されてしまう。そうすると、「補集合の要素は存在しない」という非存在が読み取れないため、「だけだ」が不自然と判断されるわけである。

7.2 「補集合の要素の存在の否定」がわかりやすく自然な「数量語+だけだ」

(23) の「だけ」は名詞文「治療費は 1000 円だ」の述語の位置で、述語の位置の名詞「1000 円」は、主語の性質を規定しているが、「だけ」が不自然にならない。

(23) 今日の治療費は 1000 円だけだった。

数量語「1000 円」の解釈には、幅をもつ量ととらえるか、終了限界点そのものととらえるかで解釈が 2 つある。蔡薰婕 (2017: 22) によると、たとえば、(24) の「7 km」のような数量語の解釈には 2 つあるという。「一つは「7 km」を「スケール上の幅」とする考え方である。つまり「7 km」を前述のプロセスが完了される際の開始限界点「0 km」から終了時までの「幅」だと考える。もう一つは「7 km」が終了限界点そのものだとする考え方である。(蔡薰婕 2017: 22)」

(24) 太郎が 7 km 歩いた。(数の表現)

(23) のコンテキストでは、いつもの治療費「3000 円」と今回の治療費「1000 円」がスケールにおいて個としてとらえられていて、両者の間に「スケールにおける幅」が認識できる。「いつもの 3000 円」から「今日の 1000 円だ」を引いて「2000 円」という差額 (モノ) の非存在 (他はない) が表せているので、「だけだ」が不自然にならない。

「数量語+だけだ」の容認度は、数量語が「スケールにおける幅」をもつものと解釈されているか、あるいは、終了限界点そのもので形容詞的に解釈されるかによるのである。前者の場合、たとえば、(23) の「1000 円」のような場合は、補集合の要素のモノの存在が個の存在として認識でき、その否定、つまり、モノの非存在 (他はない) が読み取れるので、「だけだ」が不自然にならない。一方、後者の場合、たとえば、(20) の「8 歳」などは「7 歳から 8 歳まで」などとしなにかぎり、幅は認識されない。「8 歳」だけならば終了限界点そのもので形容詞述語と解釈されるしかなく、「他はない」という非存在が読み取れないので、「だけだ」が不自然になるのである。

8. おわりに

8.1 本稿で明らかにしたことまとめ

本稿では、日本語学習者が多用する「名詞+だけだ」が不自然になりがちな要因として (25) を導いた。

(25) (=17) 「だけだ」が自然・不自然と判断される要因

述語の位置の「だけだ」は、「～なのではなく、～だけだ」というような否定をともなって表されることが多い。この「～なのではなく」は「前提集合なのではなく」のことが、「補集合の要素はない」という否定をも表している。普通は「前提集合なのではなく」から「補集合の要素はない (他はない)」が導かれるが、導きにくい場合もある。しかし、「補集合の要素はない (他はない)」というモノの非存在がかるうじてでも読み取れれば「だけだ」は不自然にならない。逆に、「補集合の要素はない (他はない)」というモノの非存在が読み取れないならば「だけだ」が不自然になる。

たとえば、「この本は1000円だけだ」が不自然なのは、「1000円」が「安価だ」というように形容詞的に解釈されていて、前提「高価だ」との間に明確な区切りがなく、「補集合の要素の存在の否定（他はない）」というモノの非存在が読み取れないためである。「数量語+だけだ」は形容詞的に解釈されがちで「モノの非存在」が読み取れないので、不自然になりやすい。

(25) を導く過程で、質を規定する名詞に接続する「だけだ」の「だけ」は「～ではなく、～」という否定をともなって表されることが多いこと、そして、その否定には様々なヴァリエーションがあることがわかった。ヴァリエーションの1つは「前提集合の否定」から「補集合の要素の存在の否定（他はない）」が導けるタイプで、このタイプでは後者のほうが目立っている。もう1つは「前提集合の否定」から「補集合の要素の存在の否定（他はない）」が導きにくいタイプで、このタイプでは前者のほうが目立っている。とはいえ、「だけだ」を含む文ではすべて以下の(26)～(28)に示すように、「補集合の要素の存在の否定（他はない）」というモノの非存在が読み取れるようになっている。

- (26) 「朝食はバナナだけだ」などのような典型的な用法の「だけだ」の場合は、「～はなく、～だけだ」というような「補集合の要素の存在の否定（他はない）」という非存在が表せているので、「だけだ」が不自然にならない。
- (27) 「長男は花粉症で風邪だが、次男は花粉症なだけだ」などのように質を規定する名詞述語に付く「だけだ」の場合は、「補集合の要素の存在の否定」という非存在が、「前提集合なのではない」より目立っている。しかし、「補集合の要素の存在の否定（他はない）」という非存在が表せてはいるので、「だけだ」は不自然にならない。
- (28) 「彼は父より少し年下なだけだ」などのように「前提集合なのではない」が目立っていて「補集合の要素の存在の否定（他はない）」という非存在が認識しにくいタイプもある。しかし、認識しにくくても「補集合の要素の存在の否定（他はない）」という非存在がないことはないので「だけだ」は不自然にならない。

これに対して、日本語学習者が用いる「だけだ」は、たとえば、「彼は係長だけだ」や「私はまだ8歳だけだ」などのように、「補集合の要素の存在の否定（他はない）」という非存在が読み取れない。「係長」「8歳」などが形容詞的に解釈されているため「補集合の要素の存在の否定（他はない）」という非存在が読み取れず、「だけだ」が不自然と判断される。

8.2 「だけだ」の容認度の個人差

最後になったが、「だけだ」の容認度には個人差があることについて述べておきたい。

たとえば、(29) はイタリア語母語話者が日本語で書いたエッセイの一部だが、「だけだ」が自然か不自然かの判断には個人差がある。「風鈴は涼しさをもたらす癒しだ」ということが前提集合になっており、その性質が存在しないことが読み取れる人にとっては「だけだ」が許容される。

一方、その性質が存在しないことが読み取れない人にとっては、「だけだ」が不自然と判断されることになる。「ストレス」のような質を規定する名詞の場合は、普通は「だけだ」を付ける

と不自然になるが、(29)のように例外的に許容される可能性もあるということである。

- (29) 日本人の耳には涼しさをもたらす風鈴のようだが、僕には不眠に繋がるストレスだけだだったので、攻撃を実行せざるをえなかった。

(アレッサンドロ・ジェレヴィーニ『食べたいほど愛しいイタリア』)

これに対して、(30)の「プラス30分」のような量の規定の場合は、「なだけだ」でなく、「だけだ」を付けるのが普通だが、例外的に「なだけだ」が許容されることもないわけではない。(30)が許容されるのは、今日の勤務は6時半から9時の2時間半で短い、普段は3時間でプラス30分だけだと言うことによって、「プラス3時間などでなく、プラス30分なのだ」と言おうとしており、「プラス3時間から30分を引いた差」を量として認識しやすいからである。

- (30) 今日は6時半～9時という短い短い勤務。／とは言っても普段はこれにプラス30分なだけだね。／小さな収入ですが、コツコツ積み重ねるしかない。

(「ポテト日和」2010年2月25日, <http://poteto107.exblog.jp/page/2/>)

いずれにしても、「補集合の要素の存在の否定(他はない)」が認識できれば、「だけだ」は不自然にはならない。「補集合の要素はない(他はない)」というモノの非存在(他はない)が読み取れるなら、(17)(= (25))で示したとおり、「だけだ」は不自然と判断されないのである。

8.3 今後の課題

本稿では次の(31)(32)のような「動詞+だけだ」、(33)のような「形容詞+だけだ」については言及しなかったが、これらについても(17)(= (25))の基準が適用できるか確認する必要がある。これについては今後の課題として残されている。

- (31) 車の音がしてもおどろかず、ちらりとふりかえっただけで、そのまま道のはしを町の方向にむかってゆっくりと歩きつづけた。(開高健『パニック』)

- (32) 同会議についてガリ国連事務総長は(略)、「(ボスニアのセルビア人勢力には)最後のチャンスが与えられなければならない。もし、それで彼らがノー、というなら我々は次の手段を取るだけだ」と述べた。(朝日新聞93・4・30, 元は森山卓郎(2002)より)

- (33) 変なことを質問したとしても、私には悪意はないの。それはわかってね。ただ好奇心が強いだけ。(村上春樹『1Q84 BOOK1』)

参考文献

安部朋世(1999)「ダケの位置と限定のあり方—名詞句ダケ文とダケダ文—」『日本語科学』6: 32-48. 国立国語研究所.

蔡薰婕(2017)「スケール構造を用いた程度修飾・数量修飾の分析」『日本語の研究』13(2): 18-34. 日本語学会.

森本順子(1992)「誤用研究ノート—「だけだ」を中心として—」藤森ことばの会(編)『藤森ことば論集』37-61. 大阪: 清文堂.

- 森山卓郎 (2002) 「「取り立て助詞の文末用法をめぐって—「ただだ」を中心に—」佐藤喜代治 (編) 『国語論究第 10 集 現代日本語の文法研究』 145–159. 東京: 明治書院.
- 中西久実子 (2012) 『現代日本語のとりたて助詞と習得』 東京: ひつじ書房.
- 中西久実子 (2014) 「「名詞 + ただだ」が不自然になる原因—「弟は 10 歳ただだ」はなぜ不自然なのか—」 『日本語教育』 159: 17–29. 日本語教育学会.
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』 東京: むぎ書房.
- 寺村秀夫 (1986) 「「前提」「含意」と「影」」 『論集日本語研究 (一): 現代編』 255–271. 東京: 明治書院. (寺村秀夫 (1992) 『寺村秀夫論文集 II—言語学・日本語教育編—』 43–58. 東京: くろしお出版に再録).
- 渡辺実 (1971) 『国語構文論』 東京: 塙書房.

Why “Quantifier + *dakeda*” Tends to Be Pragmatically Impermissible?

NAKANISHI Kumiko

Kyoto University of Foreign Studies / Project Collaborator, NINJAL

Abstract

Learners of Japanese as a second language tend to misuse *dakeda* ‘just’ as in *Kare wa 8-sai dakeda* ‘He is just eight years old.’ A previous study has shown that *dakeda* is impermissible in a noun sentence when it follows a predicate nominal prescribing the quality of the subject. Morimoto (1992) claims that *dakeda* is incompatible with describing the attribution of the subject of a sentence. It is true that *dakeda* is not pragmatically permissible, when used in such a sentence as *Kare wa kakaricho dakeda* ‘He is just a chief,’ because *kakaricho* ‘chief’ describes the attribution of the subject of the sentence. On the other hand, Nakanishi (2014) points out that there is a counterexample to Morimoto’s (1992) assertion. Although Nakanishi (2014) presents a factor as to why *dakeda* is taken to be pragmatically permissible, it is not sufficient as Nakanishi (2014) fails to present a factor as to why *dakeda* is not pragmatically permissible. In this article, I present the crucial factor why “Noun + *dakeda*,” especially “Quantifier + *dakeda*,” is often taken to be pragmatically impermissible. In conclusion, in particular for “Quantifier + *dakeda*,” it is difficult to find a clear distinction between the focus noun and its paradigmatic element on a scale. Consequently, a reader cannot understand that there is something deficient between the focus noun and the paradigmatic element. For example, *Kono hon wa 1000 yen dakeda* ‘This book costs 1000 yen’ is pragmatically impermissible, because it is difficult to find a clear distinction between the focus noun “1000 yen” and its paradigmatic element “5000 yen” on a scale. Moreover, the reader takes 1000 yen as adjectival “cheap,” and there cannot be imagined something deficient between “cheap” and “expensive.”

Key words: toritate particles, *dakeda* ‘just’, quantifier, adjectival predicate, deficiency